

# イセエビは植食魚の捕食者になり得るか

水産基盤グループ

## 研究の背景・目的

ウニなどの植食動物の過剰な摂食により藻場が全国的に減少している中で、最近、ウニの密度がイセエビの捕食により減少し、藻場が維持されている例を高知県のイセエビ保護区で発見しました。西日本では、ウニのほかにブダイ、アイゴなどの植食魚による大型海藻の食害も問題になっていますが、イセエビのように定着性のある保護しやすい捕食者は知られていません。そのような中で、ブダイ、アイゴは夜間岩陰に隠れて眠るため、夜行性のイセエビはその捕食者になり得るといふ仮説の検証に取り組んでいます。

## 研究成果

高知県のイセエビ保護区とその周辺域で、絶滅して久しい大型海藻のカジメをタイムラプス撮影装置とともに設置して、食害状況を観察しました。カジメはいずれも1ないし2尾のブダイに食べられて消失しましたが、保護区外では食害が3、4日目に始まったのに対して保護区内では比較的長い期間（最長14日間）、植食魚が全く観察されない状態が続きました。しかもカジメを食べたブダイは全長46cmの大型個体1尾（図1）で、小型のブダイやアイゴは全く観察されませんでした。この結果は、当初の予想「保護区内では、大型のイセエビの捕食により植食魚は稚魚や幼魚の段階では生き残れず、生息しても、大型イセエビの捕食を免れることができる、他所から移動してきた大型個体に限られる」に合致するものとなりました。

## 波及効果

植食魚は、ウニと異なり、移動性が高いため、食害防止対策が難しい植食動物です。植食魚が夜間、物陰で眠るという点に着目し、イセエビがその捕食者になり得ることが明らかになれば、捕食者による植食動物の制御を通じての藻場保全という、将来目指すべき資源や漁場の管理方法として役立つものと期待されます。

（本研究はJSPS科研費JP20K06196の助成を受けたものです。）



図1 保護区内に設置したカジメの摂食に現れた超大型ブダイ（全長46cm）。カジメ周辺の枠やネットは、植食魚のサイズ測定用に開発した装置の一部。

（川俣 茂）